
待ち合わせ

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
待ち合わせ

【Nコード】
N1357A

【作者名】
クノウ

【あらすじ】
オリジナルSSです。

「いつてきまゝす。」今日は“あの子”と会う日だった
「行つてらっしゃい、とお昼はどうする？」

「うゝん…、どっかで食べてくるからいいよ。じゃあ」

親もこのことを知っているので、特に何も言つてはこない

「今日はいい日だな。」そして歩き始める

二十分くらい歩つたところで、足を止める

「公園……か」

誰もいない公園に、吸い寄せられるように入つて行き、噴水の淵に腰を下ろす

「久しぶりだな。」“はい、お久しぶりです。”

「俺、ここに来るのがずっと怖かつたんだ。」“そうですか…”

「ここは、お前に初めて会つた場所で、お前と最後に別れた場所だからな。」

“私はずっと会いたかつたですよ？会いに来てくれるのを待っていましたから。”

「そつえば、俺つてまだお前に『返事』言つてなかつたよな。」

“ええ……”

「俺、やっぱりお前のこと好きだつたんだ。今なら言えるのに、一年前にいえなかつたなんて……」

バカだよ、俺。離れ離れになつて気付くなんてさ。こんな俺の事なんか嫌いになつていいんだぞ。」

“そんなことないですよ、とても嬉しいです。”

「……………」。“どうかしたんですか？”

「うん、そろそろ行くか。」“はい！”

商店街に来たところで、顔見知りに会つた

「あら、奇遇ね。こんなところで会うなんて。」「ああ、そうだな。」
「お姉ちゃん！」

「考えることは同じって事かしら？」「ああそのようだ。凄い偶然だな、ホント。」

「それにしても、なんだか楽しそうじゃない。まるでデートを楽しんでる顔よ。」

「なぐに言っただよ。」「お姉ちゃん…そんな（ポツ）……。」

「ふふっ、冗談よ。でも、本当にイイ顔してるわ。少なくとも、ここ最近ではね。」

「そんなに浮かれているように見えたか？」

「浮かれているというよりは、まるで『肩の荷が降りた』って感じだったわ。」

「そうか……」

「まあ、ここで立ち話もなんだしどうせ行く先は同じでしょ？私は花でも買ってくるから、あなたは『あれ』でも買ってきてちょうだい。」

「了解。」「はい、では行きましょう。」

「ここの店も久しぶりだな。」「そうですか？」

「お使い頼まれた時以来だから、半年振りってとこかな。」

「いらっしやいませ。」

「あつ、おじさんイチゴ大福1パックね。」

「はい毎度あり〜。」

「お前はこれが好きだったよな。」「はい、大好物です。」

「二日に一度は食ってたからな。太らないか心配だったよ。」

“そつ、そんなことはありません！！”

「おつ、向こうも来たみたいだし行くとするか。」「あつ、待ってくださいよ〜。」

「待ったかしら？」「いいや、全然。」「私たちもさつききたばかりです。」

「じゃあ、行きましようか。」「そうだな……」「なんだか楽しいですね。」

そして、目的地に着いた

「また……来てやったぞ。」「ほんと、あなたは幸せ者だったわね。」「そうですか？」

「だって、今でも貴方の事を好きでいてくれる人がいるんだもの。羨ましいわ……」

「なんちゅう事を言うんだお前は！！」「そうですよ、恥ずかしいですよ」

「あら、そんなこと言っているの？まだあなたには言っていなかったけど、あの子は妊娠してたのよ。」

「なに……！！」「え……！！」「そ……そんなまさか……。でもあの時は……」

「あら？冗談だったんだけど、覚えがあるようね。」

「は、はめやがったな……！！」「人の妹を食べちゃった人には言われたくないわね。」「くっ……！！」

「お姉ちゃん……」

「でも、ほんとこんなイイ人を残して逝っちゃうなんて、あの子も罪な女よね。」

「ああ、そうだな。おかげで、未だに彼女が出来ないよ。」

「自信過剰もいいとこね。」

「そうか？肝心の振り向いて欲しい奴には、なかなか振り向いてもくれないんだけどな。」

「そう？」「ああ、いつまで『妹』に気兼ねしてるんだか……。それとも、まだ気にしてるのか？」

「そういう訳じゃないのよ。ただ、気持ちの整理がつかなくてね。」
「ふん」

「私、あの子に何もしてやれなかったんだもの。命が長くないって分かった時から、私はすべて諦めちゃったの。あの子は、残された時間を必死に生きようとしたのにね……。あなたがあの子に魅かれたのも当然ね。」
「まあな。でもあいつも気付いてたんだぞ、お前の気持ちは。」

「え!？」

「これ、あいつが死ぬ少し前に、俺に渡した手紙だ。自分がもし死んだら、お前に渡してくれってさ。」

まあ、遺書ってやつだな。ちなみにこっちは俺の分。」

そういつてポケットから手紙を取り出す

「中身はアイツらしい、最後までみんなの幸せのことが書いてあったよ。自分が死んでも立ち止まらずに、前に進み続けて欲しいってさ。お前のはなんて書いてあるんだ?」

封筒を開け、中の手紙を取り出す

「ええ……」涙が……溢れてくる。

止まらない。どうしよう。

「ほんと、あの子らしいわね。最後まで……私には幸せになれって……自分のことは気にするなって。誰も悪くない、自分が悪いんだって……、私あの子にひどいことしたのに……。ね……。許してくれるって……。」

「そうか……よかったな。他にはなかったか?」

「ん……秘密よ。」
「なんだそりゃ。」
「ふふふっ」「はははっ」「クスクスッ」

久しぶりに笑った。二人で……三人で笑った。一年前、三人で初めて出会った頃のように。

その声は空に吸い込まれていくようだ

「ねえ、もう少し……待っててくれるかしら?」

「ああ、いつまでも待つてゐるぜ。だけど、待たせすぎるなよ。」

「分かつてるわ。ただ、もう少し気持ちに整理をつけたいの。あの子の気持ちともう一度向き合つて、今度は後悔しないように。」

「ああ。そのときは聞かせてくれよ？もう不安でしょうがないんだ。」

「とか何とか言つて、本当は自信あるんでしょ？」

「そんなはず無いだろ。俺はこう見えても臆病なんだ。」

「じゃあ、その反対側のポケットに隠してるのは何かしら？」「何のことかな？」

「とぼけてもダメよ。それは…」

「べつに、君にあげるとは限らないぜ。これは元々こいつにあげる物だつたし。」

静かに石碑を見つめる

「一年前に渡しそびれたものだけど、何を今さらつて怒つたりしないかな？」

「大丈夫よ、あの子だもの。」

「そうだな。遅れて悪かつた、誕生日プレゼントだ受け取ってくれ。」

「わあ！！薬指にピッタリ。ありがとうございます、ずっと大切にしますね。」

「きつと喜んでるわね、あの子。」「ああ、きつとな。」

あいつとはたつた一ヶ月程度の付き合いだったが、俺にとってかけがいのない人になつていた。それは今でも同じだ

でも、あいつは今も俺の隣にいない

今、俺の隣には…

「じゃあ行くか。」「ええ。どこに行く？」

「そうだな… とりあえず、おまえの指の大きさ教えてくれないか？」

「はあ？」「買うときに困るだろ？」

「たく、自信過剰もいいところよ。あの子の好きだったお店にでも行

く？」

「あの店か？」「そうよ、たまには私も奢ってもらいたいし。いいでしょ？」

「仕方ない、行くとするか。ただしおかわり禁止だ。」

「あの子みたいに言わないで頂戴。私はそこまでがめつくないわ。」

「さあ、どうだか。」そして駆け出す

「あつ、こら、待ちなさい！」

その時、ポケットから手紙が落ちた
下のほうにはこう書かれていた

“お姉ちゃん。私の分まで、あの人と二人で幸せになってください。”

と。

） F i n ）

（後書き）

< font size="2">うわー！！書いた自分でも恥ずかしい文章ですね。

名前がないのは、皆さんに自分の好きな名前を想像してもらいたかったからです。

そのせいか、思ったよりもいい文章になったと思います。 < / font >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1357a/>

待ち合わせ

2010年10月16日00時24分発行